

# 経験医 J・A・エルヴェシウスとルイ十四世の軍事・外交

—— 評伝 エルヴェシウス家の人々へその三 ——

永治日出雄

## 第一節 哲学者ライプニッツとイペカ吐剤の導入

### (一)

一六九一年夏にハノーヴァーの哲学者 G・W・ライプニッツは、赤痢の特効薬が発見されたことを聞き及んだ。パリ治療院におけるジャン・アドリアン・エルヴェシウスの臨床実験が、美事に成功した三年後にあたる。Ursien Adrien HELVETIUS 1661—1727 哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスの祖父。以下この人物を祖父エルヴェシウスまたは経験医エルヴェシウスとも呼ぶ。ライプニッツに特効薬発見を伝えたのは、パリ生れの教会法学者 H・ジュステルである。学問と芸術を愛好し、ルイ十四世の顧問官を勤めるジュステルは、あらゆる分野の知識人と文通を重ね、諸国の学者や文学者を数多く歓待した。一六七二年から一六七六年までライプニッツもパリで彼の友誼に浴し、神学者 A・アルノー、物理学者 C・ホイヘンス、哲学者 N・マールブランシュ、等々と会見する。ライプ

ニッツのフランス滞在はヴェルサイユ宮との外交交渉を当初の目的にしたが、彼の多彩な科学的業績、すなわち微積分の創出、行列式の発見、普遍的記号の考察、二進法計算器の發明、懷中時計や潜航艇の設計は、ここで為し遂げられた。一六八一年イギリスに移住したジュステルは、聖ジェームズ王立図書館長に登用され、名譽革命のあとその職務に留まった。ジュステルとの文通および最新の医学的情報について、ライプニッツはハノーヴァー公妃ゾフィに<sup>(1)</sup>つぎのとおり語っている。

〔ライプニッツの一六九一年九月四日付公妃ゾフィ宛書翰〕

赤痢の治療に卓効ある樹根がフランスで発見された、とジュステル殿がイギリスから知らせてくれたのです。かねて文通のあるフィレンツェのマリアベーク殿に、私はこの件を伝えました。マリアベーク殿からの返信によれば、偉大な地理学者として知られ、カミユ枢機卿の選挙付添人でもあるバウドランド殿が、メデイチ枢機卿主宰の教皇選挙会場において私の書翰の抜粋を見ました。バウドランド殿はそうした樹根の発見を事実であると認め、さらにまたルヴォワ侯爵が軍属のあらゆる内科医および外科医に対してそれを備えつけるよう、すでに命じたと言うのです。その樹根がどんなものであるか、まだ私は知りません。しかし、こうした事実是非常に重要と思われるので、ハノーヴァー公ご自身がそれを突きとめてくださればと存じます。<sup>(2)</sup>

ハノーヴァー公妃ゾフィはその息女ゾフィ・シャルロットとともに哲学者ライプニッツの庇護者であり、またもつとも忠実な門弟ともなった。彼女は三十年戦争の際オランダに亡命したフレデリック五世の第十二子として生れ、デカルトに鐘愛された王女エリザベスの実妹にあたる。<sup>(3)</sup>《冬の国王・王妃》と評されるフレデリック五世一家が、おそらく薔薇十字友愛団の活動を媒介として、奇しくもエルヴェシウス家の祖先と係りをもつことは、すでに本稿（その一）で述べた。なお、鍊金術にも関心を寄せたライプニッツをめぐって薔薇十字友愛団に属するとの風評があり、ま

た彼の哲学的著作にはヘルメスⅡカバラ的伝統が濃厚とも言われる<sup>(4)</sup>。

ハノーヴァーの宮廷でライプニッツは一六七七年から枢密顧問官の地位を与えられ、君主ヴェルフェン家の家史を編纂するとともに、外交政策や産業開発についてしばしば建議した。また防衛と軍事に関する進言のなかでは、軍組織の再編や新兵器の導入だけでなく、軍陣医学と公衆衛生の重視を説いている<sup>(5)</sup>。とりわけ彼が怖れたのは、人馬と物資の移動に伴う伝染病の蔓延であつた。

〔ライプニッツの（一六八一年付エルンスト・アウグスト公宛）書翰〕

伝染病が接近しています。それはヨーロッパの末端からわが国境に迫り、私たちの故郷に直進しつつ、ハルツ地方を驚掴みするかに思われます。あとで非難されぬよう、いまなにができるか、を真剣に考えることが、賢明でも責務でもありません。不吉な状況のように感じられても、諦めるには及びません。我らの祈りを聴き入れる神は、疾病の蔓延を防ぐのに必要な知恵を授けてくださいました。一六六六年のペストを事例として私たちは知っています。それはシュペッサルト山地と黒い森の麓にすこし留まっただけです。なおまた、ペストの猛威のもとでも数多の人々を救うことが可能であつた、と私は信じます。適切な指示がないために、彼らは命を失いました。したがって、すべては二点に還元できます。予防と保全がそれであります。

しかしながら、確実な予防法を医家はまだ発見しておらず、実証された唯一の予防法、伝染の回避という政治的な予防法に頼るほかありません。〔中略〕感染の疑いがある人々を往来させないため、一般的警戒と個別的な警戒が考えられます。一般的警戒とは共同社会や一国の全体を対象とするものであり、個別的警戒とは特定の人物や家屋を対象とするものです<sup>(6)</sup>。

## (二)

ブランデンブルク選挙侯の嗣子フリードリッヒはエルンスト・アウグスト公の息女ゾフィ・シャルロッテと結婚し、興起したプロイセンの国王としてもやがて即位する。こうしたヴェルフェン家の隆盛に伴い、ライプニッツもベルリン王宮に招かれ、アカデミーの創設に尽力した。ライプニッツが描いたアカデミーの構想は、自国における技術・産業の発展だけでなく、普遍的な文化と人類全体の福祉をめざすものである。また、彼が提唱する『百科学・普遍学』はあらゆる学問の集積であるとともに、人々をとくに益するものとして医学や経済学を重視している。

とはいえ、ヴェルフェン家の政治的野心は痛ましい悲劇をも惹き起した。同家の嫡男ゲオルグ・ルードリッヒとの結婚を強いられたツエレ公女ゾフィ・ドロテアは、一六九四年婚家からフランスの女子修道院に逃亡することを決意する。スウェーデンの名家に生れ、ハノーヴァーで親衛隊長として仕えるO・G・ケーニヒスマルク公爵を、彼女はとくに頼りとし、国外への同行を約束させた。しかし、脱出が予定された当日、公爵は刺客によって殺害され、ゾフィ・ドロテアもアールデン城に終生幽閉される。ライプニッツの書翰のなかでイペカ吐剤に関する他のひとつは、こうした惨劇の一年後に綴られ、ケーニヒスマルク公爵の実妹マリア・アウローラに送られたものである。

〔ライプニッツの一六九五年四月二五日付マリア・アウローラ・ケーニヒスマルク宛書翰〕

拝啓。ヴォルヘンビュッテルであなたは唯一の女神ミューズと讃えられました。そこにあったアポロンの像を覚えているでしょう。アポロンはたんに詩歌の神ではなく、草木の神でもあり、古代人は魂の喜悦や身体の健康をアポロンのお陰と考えました。〔中略〕ここではあなたに讃辞を捧げるのではなく、ひとつのお願いとその理由を述べたいと存じます。ある品をお届けしますが、それは普通のご婦人には負担に過ぎるもの、そし

てあなたほどの身分のご婦人には簡略にすぎぬものです。

ご自身申されるとおり、こうして心掛ける健康こそ、学問の基礎をなすばかりか、精神と優美さの素地でもあります。悪性の体液が微々たる一滴でも血管にあれば、私たちのあらゆる麗質が破壊されます。なおまた、あなたがアマゾン河探検にも似た大旅行をされること、あなたが戦争という艱苦を共にし、偉大な英雄に随伴されることを聞き及びました。そうでなくても、人々はあなたについて心配しております。平素用いる必需品をすべてあちらで用意させると、またいつもと同じく新鮮な大気を吸えるよう、軍隊が援護してくれると、私は信じております。しかし、干天酷暑に続く夜の冷え込み、死の淵へ導くさまざまな妖怪変化。それらはもつとも美しい生命にも敬意を払いません。こうした状況に身を曝すときは、恋歌や短詩ではなく、薬草と薬劑を念頭に置くのがよいのです。

この手紙に薬の処方と同封します。これがパリから届いたのは、ちょうど旅の予定をお知らせ頂いたときでした。当惑して問合せをされぬよう、説明しておきます。あなたのことが気になったとき、私はすぐにアメリカ産イベカキユアナを思い浮べました。なぜなら、これこそ不思議な樹根の名称であり、赤痢やあらゆる種類の悪性疾患に卓効を示すのです。ハンガリーでは妙薬とされています。いまやフランスの国軍にはこの樹根が配備されている、と確言した人もあります。しかし、ドイツでこれが充分に認められているかどうか、私は信じません。(この樹根のさまざまな特性をみずからも知らぬ四年以上前に、博物蒐集協会会長への手紙で私はそうした意見を述べ、会長は私の手紙をすぐさま印刷に付されましたが……) なおまた、偉大な君主が統治される国、あなたによって宮廷が輝く国に生れる幸せを喜んで、祖国に関する事柄、祖国の保全に関するすべてに私は関心を抱きます。だからこのような薬の処方があなたをも、祖国をも不快にさせはしないと信じま

す。また、こうした薬を入手するため、適切な指示が下されるものと信じます。そして、実際にはその種の援護が不要であること、寛仁な〔ザクセン〕選帝侯が栄誉にも健康にも輝いて帰還され、近東のあらゆる勢力に勝利を収めること、ダニユーヴ河の妖精があなたの戦車に従い、あなたの完璧な美しさを讃えることを、私は祈願します。<sup>(8)</sup>

実兄ケーニッヒスマルクの横死に衝撃を受けたマリア・アウローラは、ザクセンの首都ドレスデンに逃れ、選帝侯フリードリッヒ・アウグストに保護を求めていた。武勇で鳴らしたこの選帝侯は、マリア・アウローラ的美貌と才気にたちまち魅了される。彼は一六九五年神聖ローマ帝国陸軍総司令官に任命され、ウィーンを包囲するトルコハンガリー連合軍と対戦することとなった。<sup>(9)</sup> 総司令官の愛人としてマリア・アウローラがオーストリア遠征に同行し、ライプニッツより特効薬イベカ吐剤を推奨されるのは、こうした時点にほかならぬ。ザクセン宮廷の華となり、選帝侯を補佐した彼女について、後年ヴォルテールは絶讃の言葉を贈っている。

知性と美貌によって遍く知られたこの婦人〔マリア・アウローラ・ケーニッヒスマルク〕は、外交交渉を成功させるうえで、どんな閣僚よりも有能であった。<sup>(10)</sup>〔中略〕彼女は完璧な美しさによって、ヨーロッパでもっとも愛らしい女のひとりとされ、まだ訪れてもない国々の言葉を、あたかも母国語のように話す特異な才能を備えていた。ときにはフランス語で詩歌を作るのに興じ、ヴェルサイユ生れの女性と間違えられたほどである。<sup>(10)</sup>

マリア・アウローラを従えたザクセン選帝侯は、テメシバル会戦でトルコ軍を撃破し、一六九七年ポーランドの王位をも手中にする。しかし、屈強な体軀に恵まれたフリードリッヒ・アウグストは、法外な奢侈と淫蕩でも知られ、ヴェルサイユを摸した宮廷に諸国の美女を数多擁していた。こうした環境にマリア・アウローラはながく留まりえず、

一六九八年クッペートリンブルクの修道院に隠遁する。その後も彼女は才能を惜しまれ、一旦は宮廷に返り咲いたものの、孤独と貧窮のうちに生涯を終えた。<sup>(11)</sup>

因みにマリヤ・アウローラは選帝侯との間に庶子ヘルマン・モーリスを儲けた。彼は親譲りの体軀と豪勇によって際立ち、若冠十二歳でアウグスブルク同盟軍のリール攻囲に参加する。のちにはフランス国王軍へ志願してサククスという通称で畏怖され、大砲の採用や騎馬の重視など稀有の軍事的才能を発揮した。オーストリア継承戦争のさなか一七四五年に、モーリスはフランドル方面軍の司令官に任命され、フォントワでイギリス・オランダ連合軍を撃退する。この褒賞としてルイ十五世はロワール河畔の古城シャンボールを彼に授与した。<sup>(12)</sup>

一七四六年秋に思想家ジャン・ジャック・ルソーは、ロワール河に望む城館シユノンソーに滞在し、『シルヴィの小道』など詩作と作曲を進める。城主デュパン・フランクューは哲学者ヴォルテールやデイドロと親交があり、その夫人ルイーザ・マリー・マドレーヌにルソーは愛慕の情を抱いていた。彼自身が述べているとおり、夫妻の嫁ルイーザ・アレクドリーヌ・ジュリ・デュパン・ド・シユノンソーに役立つよう、主著『エミール』は当初綴られた。<sup>(13)</sup>

勇者ヘルマン・モーリスは五四歳で急死するが、オペラ座の歌姫ヴェリエールとの間に隠し子マリー・オロールがいた。サン・シール修道院で養育されたこの娘は、モーリスが没して十三年後、パリ高等法院で彼の実子と確証される。彼女は一七七七年に三十歳年上の寡男デュパン・フランクューと再婚し、典雅なシユノンソーの城主となる。翌年出生した嗣子モーリス・デュパンを、彼女は『エミール』の原理によつて教育し、また一世代のちに生れた孫娘アマンチヌ・オロール・リュシルも、早くからルソーなど啓蒙思想家の著作を読み耽った。やがてアマンチヌは自伝的な小説をいくつか発表し、婦人解放や社会主義の運動にも係りをもつに至る。この多感な乙女こそ一九世紀屈指の女流文学者ジョルジュ・サンドである。<sup>(14)</sup>

豪胆さと優雅さを讀えられた祖先、ライプニッツやルソーと親密であつた祖先を語りつつ、精神形成の要因についてサンドはつぎのとおり言う。

したがって、私の血潮には貧者や弱者の血とともに王家の血が混合しております。また、宿命と呼ばれるものは、個人の性格にほかならず、個人の性格とは各人の身体組織にほかなりません。そして、各人の身体組織はさまざまな人種の混成ないし併存から生じたものであり、いろいろな類型が相互に連関し、不斷に変容した成果であります。それゆえ、生來の遺伝形質、身体的・精神的遺伝形質こそ、各人とその祖先を繋ぐ重要な連帶性である、とつねに私は結論するのです。<sup>(15)</sup>

## 第二節 セヴィニエ侯爵夫人と祖父エルヴェシウス

### (一)

マザラン死後の重鎮 J・B・コルベールと M・ル・テリエは、強大な国王軍の育成に着手し、太陽王の領土拡大や海外発展を促進した。フランス海軍を創設したのは財務総監コルベールとその長男 J・B・C・セニユレーであり、一六六一年十八隻に止まった軍艦が、一六七七年には一一六隻、一六八三年には二七六隻へと激増する。こうした軍事力を誇示しつつ、ルイ十四世はインドやセイロンに商館を設置し、ミシシッピ流域に植民地ルイジアナを建設した。<sup>(16)</sup> 交易や植民の増大に伴って、海上における警護と医療も国王軍の重要な任務となる。遠洋航海をする人々は、暴風の襲来や外敵の攻撃だけでなく、劣悪な食物、不衛生な船室、疾病の蔓延に悩まされた。すでにヴァスコ・ダ・ガマ



の艦隊は壞血病の發生に苦しみ、チフス、黄熱、赤痢など伝染病の感染が海兵や船乗りをしばしば短命に終らせた。一六七三年にコルベールは主要な軍港プレスト、ロシュフォール、トゥーロンに海洋保健機関を設置し、さらに海軍長官セニユレーは航海における医療を下記のとおり法制化した。<sup>(17)</sup>

〔一六八九年四月二日付勅令〕

十以上の船舶を有するすべての艦隊には、航海病院を付設せねばならない。また、重要な成員としてつぎの種類の医官が、軍艦に乗り込むよう、この法規は定める。すなわち、第一級船舶については首席外科医（月給七五ルーヴル）、次席外科医（月給三〇ルーヴル）、薬剤師（月給二四ルーヴル）、外科助手（月給一八ルーヴル）、第二級船舶については首席外科医（月給六〇ルーヴル）、次席外科医（月給二四ルーヴル）、薬剤師（月給二四ルーヴル）、外科助手（月給一五ルーヴル）、快速艦については外科医（月給四〇ルーヴル）、輸送艦については外科医（月給四〇―二四ルーヴル）<sup>(18)</sup>。

一六八四年シャム王国とフランスの間に友好関係が成立し、首都アユタヤからヴェルサイユへ使節団が派遣される。オランダやイギリスへの反発から、シャム王国は香料の独占権をフランスに与え、見返りに織物の輸入を望んでいた。五年後にルイ十四世はデュクネ・ギトンを駐シャム大使に任命し、三百人の海兵と軍艦（水鳥丸）を用意させる。海洋における保健と医療を重視し、イペカ吐剤の創案にいち早く注目した海軍長官セニユレーは、（水鳥丸）の遠洋航海に周到的な配慮をした。<sup>(19)</sup>

〔海軍長官セニユレーのエルヴェシウス宛書翰〕

拝啓。シャムへ派遣する人々に必要なだけ、貴下の薬剤を用意できるとご回答頂き、欣快に存じます。患者三百人について各々三服ずつ、至急準備されることをお願いします。なお、海路を経ても変質せず、シャムで

も効力をできるだけながく保つよう、調合されれば幸いです。

# エルヴェシウス殿<sup>(20)</sup>

一六八九年三月十三日、ヴェルサイユにて

このような海外雄飛の過程でフランスはイギリスと激しい抗争を繰り返し、名誉革命の進展によって両国の関係が一段と悪化する。放逐されたジェイムズ二世は太陽王に庇護を求め、他方新しい国王ウィリアム三世はオランダ、スペイン、ドイツ諸邦と同盟を結んだ。一六八九年七月ジェイムズ二世の反撃を支援するため、フランス海軍は軍港ブレストに集結し、海軍長官セニユレーもブルターニュに到着する。<sup>(21)</sup>折しもマリー・ド・ラビュタン＝シャンタール・セヴィニエ侯爵夫人はレンヌ近郊の領地に滞在し、当地の緊迫した状況を書き誌した。

## 〔セヴィニエ夫人の一六八九年七月二十日付グリニャン夫人宛書翰〕

ポメル＝ユ殿もここから出発しました。ブレストに関して殿が沢山話してくれたので、それをあなたにも伝えたいと思います。あなたのほうがよくご存知かもしれませんが……。エストレ元帥は軍艦に乗り込みました。すでに一切の命令が下され、陸上で行なうことはありません。元帥は枢要な地位にあり、欠かせない人物なので、ブレストに戻り、そこで待機するよう、国王から命ぜられたのです。セニユレー殿も乗船しています。この重大な戦いを統率することが、彼の責務とされています。シャトルノーも一緒におります。まもなく合流する騎士トルヴィルを待っています。トルヴィルが来れば、六十隻以上の軍艦が編成され、頼もしい軍勢となるのです。しかし、ベル＝イル島から八キロ離れたウエサンという島に、イギリスとオランダの軍艦が六十隻以上も隠れ、トルヴィルとの合流を阻止する構えです。わが子よ。今次の戦いがどれほど重要か、お判りになったでしょう。インド征服に赴く恵まれた若きバッカス神のように、セニユレー殿が私には感じられます。<sup>(22)</sup>

フランス海軍を育てたコルベール一門に対抗して、ル・テリエとその嫡男F・ルヴォワは強大な陸軍を築いた。この父子はいずれも陸軍長官および国璽尚書を歴任し、まずル・テリエが軍隊における指揮・身分の徹底を法制化する。さらに、より強引なルヴォワが民兵徴募の制度を敷き、兵役義務の制度へ道を拓いた。一六六八年に歩兵七万と騎兵三万五千を主力とした陸軍が、一六九〇年には歩兵三八万を含む総員四四万に激増する<sup>(23)</sup>。奇襲のための竜騎兵团、新戦術としての砲兵隊や工兵隊も編成された。一六九〇年七月に彼が逝去すると、セヴィニエ夫人はつぎのとおり従弟フィリップ・エマニュエル・クラランジュに語った。

〔セヴィニエ夫人の一六九一年七月二六日付クラランジュ宛書翰〕

偉大な閣僚、枢要な人物であるルヴォワ殿がなくなりました。彼はきわめて重要な地位にあり、ニコル殿に言わせれば、きわめて幅広い〈自我〉をもち、さまざまな事柄の中心にいたのです。どれほどの事件、意図、計画、秘密に係り、どれほどの利害を選び分け、どれほどの戦争に着手し、どれほどの陰謀を企み、どれほどの挫折にみずからも陥り、ひとにも蒙らせたことでしょう。「ああ、神よ。すこしだけ時間をお授けください。サヴォワ公を屈服させ、オレンジ公を追いつめるのに……。」ならぬ。もはや一瞬たりともそなたは有しない<sup>(24)</sup>。

好戦的なルヴォワの唱導によってルイ十四世は併合政策を拡大し、一六八一年にストラスブールの占領を、一六八八年にファルツの掠奪を強行した。また、一六八九年からはイギリスなど列強を敵としてアウグスブルク同盟戦争に突入する。しかし、この戦争でフランスはウイリアム三世からしばしば苦杯を喫し、カレーやサン・マローの港湾も砲撃に曝された。イギリス軍は一六九五年八月ブリュッセルを爆撃し、軍事的な要地ナミュールを占領する。ジェームズ二世の庶子ベルヴィッツ將軍の回顧によると、この会戦ではトロイ炎上を想わせる凄惨な絵巻を繰り上げられた<sup>(25)</sup>。セヴィニエ夫人は海軍長官セニユレーの一家と懇意であり、またクラランジュの妻マリー・アンジェリックも陸軍

長官ルーボアの従妹にあたる。<sup>(26)</sup>しかし、これら聡明な貴婦人は太陽王の栄光に眩惑されぬ眼力を備えていた。ナミュールの惨状をセヴィニエ夫人は痛嘆し、徴兵に伴うパリ市民の艱苦をクーランジュ夫人も描写する。

〔セヴィニエ夫人の一六九五八年八月六日付クーランジュ夫人宛書翰〕

おお、神よ。ナミュールでなんと多くの血が流されたことでしょう！なんと多くの涙！悲嘆に暮れるなんと多くの寡婦や母親！それでも、まだ充分でない、と野蛮にも人々は感じているのです。ヴィルロワ元帥がいま一度突撃と死闘を試み、哀れなヴォーデモンを虐殺することを、彼らは欲しています。なんとという狂乱！<sup>(27)</sup>

〔クーランジュ夫人の一六九五九年九月二日付セヴィニエ夫人宛書翰〕

昨日パリではだれもが氣違いのようになりました。どこも絶望した女ばかりです。路地を駆けまわる女もあり、教会に閉じ籠る女もあります。そして、聞こえて来ました。「もはや夫は帰らない。」「もはや息子はいない。」帰らない、と泣かぬ女もおりますが、同じように絶望しているのです。会戦が行なわれ、勿論勝ったのよ、とフィエスク公爵夫人が言われました。そして、オラニエ公（ウィリアム三世）が捕虜になった、と付言されました。その夕私はケルナン夫人のもとに行き、そこでシュリ夫人、リュド侯爵夫人、シヨヌ夫人、そのほか十二名ほどの方々と一緒になりました。フィエスク公爵夫人もそこにおられました。充分にお喋りしたあとで、（趣向を替えて）頭を働かせるよう、推論の真似ごとを試みました。会戦などしないほうがよかった、というのが私の帰結です。彼女らはみな私をあざ笑いました。今日会戦の結果が届いて、私の推論が正しいものとなりました。私が軍隊を指揮したように、彼女らはいま思っています。私の洞察力にだけ感心しており、現在を褒め、まえには咎めた理由を彼女らはほとんど考えない、とそこから結論しましょう。昨日は狂愚と思われ、今日はこの世でもっとも有能とされました。実際に私は狂愚でもなく、有能でもありません。実際には書翰が届

いて、人々がつぎのように認識しただけです。すなわち、全軍を危険に曝さずに、会戦を行なうことは不可能である、と。ル・メーヌ侯爵や軍隊のあらゆる幹部と同じく、コンティ殿もこうした事実を国王に伝えたはず<sup>(28)</sup>です。

## (二)

ネーネルランドでの激戦が行なわれた頃、セヴィニエ夫人はラングドックに旅し、長女フランソワーズ・マルグリット・グリニャン夫人の婚家にいた。プロヴァンス総代行官を勤めるグリニャン家では、ふたりの孫の縁組が相次いで纏まり、婚礼の準備に多忙であった。美人の血筋を受け継いだ孫娘ポリヌをセヴィニエ夫人はとくに鐘愛し、幼時からしばしばその教育をも引き受けた。しかし、ポリヌがシミヤーヌ男爵に嫁ぐ数カ月前から、実母フランソワーズ・マルグリットが病魔に倒れ、看護のためヴィニエ夫人も壮麗な城館グリニャンにそのまま留まる<sup>(29)</sup>。この頃よりクーランジュ夫妻からの手紙に医療に関する叙述が多くなり、セヴィニエ夫人の返書は途絶えがちになる。

### 〔クーランジュ夫人の一六九五年九月三十日付セヴィニエ夫人宛書翰〕

グリニャン夫人のご病氣、すなわち胃病について手際よくお話したいと存じます。奥様。私が患らったものと同じです。耐えられぬので、あらゆる療法を試みました。そうした経験がお役に立てば幸いです……九カ月間カレットからは滴下薬を頂き、痛みはまったくなくなりました。しかし、胃部の緊張が相当強くなり、恢復したわけではありません。打ち明けて言えば、第二の病氣を授かったようなものです。エルヴェシウスを訪ねました。彼にはアブサントを投薬して頂き、私の胃が完全に治癒しました。ただし、微熱を感じるので、鉾水を勧められ、驚くほど快適になりました。私は太り始め、果物を食べ、昼食も夕食も摂ります。奥様。一言

で表わせば、もはや二カ月前の自分とは同じ人間ではありません。なぜこれほど詳細に語るかが、お判りになったでしょう。だから、グリニャン夫人をパリにお連れください。三週間のうちにエルヴェシウスが彼女の胃を快癒させる、と私は約束します。胃こそ大抵の病気を発する源です。<sup>(30)</sup>

文芸や歌謡を愛するクーランジュ夫人は、時流に流されぬ見識をもち、従姉セヴィニエ夫人から篤く信頼されていた。プロバンスにおけるセヴィニエ夫人の心労を知って、夫妻は評判の高いジャン・アドリアン・エルヴェシウスを推挙する。彼らの友人であるブルターニュの領主シヨヌ侯爵夫人や民謡の得意なモンジュリオン嬢も、経験医エルヴェシウスから恩恵を受けていた。この〈オランダ医師〉は一六八七年に王太子の難病を快癒させ、すでに当時セヴィニエ夫人の周辺でも話題にされた。<sup>(31)</sup> 愛娘の容態と己れの苦悩についてセヴィニエ夫人の返書をつぎに挙げる。

〔セヴィニエ夫人の一六九五年十月十五日付クーランジュ宛書翰〕

親愛なる従弟よ。そなたにありあまる感性、力能、健康、喜悅のすべてを、精妙な魔術によって娘の身体組織に輸血してくだされば、一層有難く思います。三カ月まえから私の娘は病に伏しております。すこしも危険ではない、とひとは申しますが、あらゆる病気のなかでもっとも悲惨で怖ろしいものと私は感じます。隠さずに言えば、私自身が死ぬほどの思いで、彼女を見守る辛い夜に耐え切れません。なおまた、最近の病状がきわめて激しいため、上腕の瀉血すら必要となりました。あまりにも多くの血をすでに失っているのに、なお血を抜くとは、なんと奇怪な療法でしょう。蠟燭を両端から燃やすようなものです。彼女もそう叫びました。というのは、極度の衰弱と激変のなかにあって、なにびとも及ばない勇氣と忍耐を示してくれるのです。〔中略〕このように苦悶する娘を眺めては、どんな母親もながく生きることができません。恭しく神慮に哀願するばかりでございます。<sup>(32)</sup>

グリニャン夫人はとくに憂慮される容態にあり、しばしば生死の境をさ迷った。以前から経験医や民間薬にも敬意を示し、無能な宮廷医を擲擧したセヴィニエ夫人が、わらをも掴む気持で、クーランジュ夫妻の助言に耳傾けたことは確かである。この前後にグリニャン夫人の病状を詳しくバリへ記述した書翰が、さらに数通存在したようにも思われる。祖父エルヴェシウスが勧めた療法は、イペカ吐劑やアブサントの服用と穏和な風土への転地であった。

〔クーランジュ夫人の一六九五年十一月七日付セヴィニエ夫人宛書翰〕

親愛なる友よ。お伝えくださった病状をエルヴェシウスはきわめて熱心に吟味されたあと、暇をみてさらに考えるため、あなたの手紙をお借りしたいと申されました。そして、昨日手紙を返しに来られました。彼が確信したところでは、強烈な大氣がグリニャン夫人の身体によくありません。できれば安樂な輿に乗せて、ゆっくり旅をさせてください。そうしてリヨンに着けば、ただちに楽になると言われるのです。このような療法に私たちも賛成します。我らの導き手エルヴェシウスは哀れな《歌姫》の命を救いました。どこから入手したか知りませんが、彼は出血を止める妙薬を備えています。彼は非常に上品で聡明な男です。デブレと瓜ふたつほど似ているので、知恵者らしくない容貌の持主ですが……。親愛なる友よ。あなたに報いるため、私があらゆる助言をできるよう、グリニャン夫人に関する新しい情報をさらにお届けください。<sup>33</sup>

二年前にセヴィニエ夫人はもともと親しい友ラ・ファイエット夫人を喪い、みずからも七十歳の高齢に達していた。彼女の膨大な書翰はもともと愛娘との別離の辛さから始められたものである。そのように慈しんだフランソワーズ・マルグリットが重病に陥ると、老いた母親が不眠不休の看護を続けた。しかし、あまりにも献身的な労苦はセヴィニエ夫人の心身を極度に憔悴させ、一六九六年四月一八日ついにその生命を奪い去った。<sup>34</sup>

フランソワーズ・マルグリットにはセヴィニエ夫人の死がしばらく隠されていた。衝撃によって病状が悪化するの

を懸念したからである。クーランジュ夫妻は嫁いだばかりのポリヌ・シミヤヌ夫人に哀悼の手紙を書き、彼女の母親に転地療養をさせるよう再度進言する。

〔クーランジュ男爵の一六九六年四月二五日付シミヤヌ夫人宛書翰〕

ああ、奥様。私たちすべてになんとという衝撃でしょう。私について言えば、この可哀想な従姉にもはや会えない、と茫然たる気持です。この世に生れて以来、彼女にはなんと緊密に結びつき、なんと優しい不変の友誼で支えられたことでしょう。ここで行なわれている一切をご覧になれば、あなたの祖母の才能をさらによく認識されるはずです。なぜなら、彼女ほどの才能はもはや見当らず、無限の悔恨を抱きながら公衆は、彼女に然るべき榮譽を捧げつつあるのです。〔中略〕泣くために、失ったものを惜しむために、私は集まっています。そして、私たちの軽くない苦悩のなかには、ご母堂の健康を憂慮していることが含まれます。ご自身で書かないとしても、せめて召使に申しつけて、近況をお知らせくださればと思います。ご母堂ならびにあなたの健康がきわめて大切であること、つぎの理由によってとくにそうであることを、よくお考えください。すなわち、セヴィニエ夫人の霊を祀るには、娘や孫に寄せた彼女の愛情を充分に認識できるよう、あなたやグリニャン夫人と親密になることがまず必要であります。<sup>35)</sup>

クーランジュ夫妻の助言と祖父エルヴェシウスの療法が効を奏したのか、フランソワーズ・マルグリット・グリニャン夫人はやがて奇蹟的に快癒し、一七〇五年六十歳に至るまで存命した。また、一七二四年から『セヴィニエ夫人書翰集』の編纂や刊行が始まり、激しい性格と深い信仰を併せ持つポリヌ・シミヤヌ夫人は、編纂の複雑な過程において遺族としてとくに重要な役割を演じた。<sup>36)</sup>



### 第三節 祖父エルヴェシウスとフランス国王軍

#### (一)

フランス陸軍の基礎を固めたル・テリエは、前線における食糧の補給や兵士の医療にも注目すべき功績を残した。軍需物資を入札する制度が設けられ、糧秣を運搬する輜重隊が編成されたのも、彼の創意からである。傷病兵のため前線に簡易医局が、カレーなど要地には常設の医療機関も存在したが、ル・テリエにより創設されたダンケルクの野戦病院は、ヨーロッパ随一と称讃された<sup>(37)</sup>。しかし、軍隊における衛生・治療は一般に劣悪であり、たとえば一六六七年シャルルロワを巡回した監督官は、下記のような報告書をルヴォワに差し出す。

兵士の宿舎は憐れなものである。彼らは麦藁小屋に詰め込まれ、六人に四つのベッドしかない。暖めたいと思っても、火災という大変な危険がある。いつも床が泥だらけなのに、火を慎む必要があるので、兵士はつねにじめじめした状態にある。二十日前ここに到着した中隊には、ひとりの患者もいなかったが、いまでは百人<sup>(38)</sup>以上も患者がいる。因みにひとりの従軍司祭も、ひとりの外科医もここにはいない、と余儀なく私は報告する。絶えざる戦争は傷病兵の激増をもたらし、一六七一年ルイ十四世はアンヴァリッドの造営を命じた。この広大な軍事病院は一六九〇年に完成し、患者三千人の収容が可能となる。ここで兵士たちは治療と看護を受けるとともに、衣服の仕立てなどの仕事を課せられた。陸軍長官ルヴォワはみずからアンヴァリッドの作業場を査察し、また快癒した兵士を各方面の前線に送るため、特別の部隊が待機していた。ルヴォワがフランス王国軍にイペカ吐剤の常備を命じ

たのもこの時期である。軍陣医学の強化が必要となるにつれ、従来蔑まれた外科医、経験医、薬剤師の登用も多くな<sup>(39)</sup>る。アンヴァリッドの創建は各国の軍事政策に相当の影響を与え、イギリスではシエルシア王立病院の建設を促した。なお、一七一七年にロシア皇帝ピョートル一世はバリを訪問し、天文台、王立薬草園、ゴブラン織物工場などともにアンヴァリッドを視察した。ルイ・ド・ルヴロワ・サン＝シモン公爵は著名な『回想録』において簡潔にこれを記録する。

聖霊降誕大祝日の五月一六日、ロシア皇帝はアンヴァリッドを訪ね、そこであらゆるものを眺め、意欲的にくまなく点検された。食堂では兵士のスープやブドウ酒を供され、彼らのため乾杯しながら、肩を叩き、戦友と呼ばれた。付設の教会、薬剤室、治療室に皇帝は大いに感嘆し、建物全体の秩序にとりわけ魅了されたようである。ヴィラール元帥が皇帝に敬意を捧げた。皇帝を見たい一心から、ヴィラール元帥夫人もそこに來ていた。皇帝も彼女に気づき、丁重に挨拶された。<sup>(40)</sup>

フランスの誇る名将C・L・H・ヴィラールは、二十歳でチュレンヌの軍営に入り、未曾有のライン渡河やオランダとの交戦で頭角を現わした。傑出した戦略によって彼はアウグスブルグ同盟戦争でも武勲を重ね、講和成立の直後一六九八年に大使としてウィーンに派遣される。ヴィラールの外交に課せられた使命は、オーストリアとの連繫を強め、スペインによるイタリア占領を排除するところにあった。しかし、一七〇一年スペイン国王カルロス二世が逝去するや、その王位継承を狙うルイ十四世に近隣諸国が一斉に離反し、オーストリアにおけるフランス大使も危機に曝される。こうしてヨーロッパにふたたび戦雲が広がり、ヴィラールは僅かな手兵とともにウィーンを脱出した。<sup>(41)</sup>

つぎに掲げるヴィラールの手記は、バイエルンからサヴォワに至るアルプス越えの苦難を語る。

この通信によってヴィラール侯爵は、戦争が激烈になり始めたことを知り、(通過する土地に少しも留まら

ず)、能うかぎり迅速に行軍を続けた。しかし、五百里(二千キロ)に及ぶ旅の疲労、夏季の猛烈な暑さ、そしてまた陰鬱な気分が彼の健康を害するようになった。サヴォワを横切る頃から、彼はきわめて激しい赤痢に襲われ、生命の危険を感じながら、トリノへ馬で辿りついた。そこでの一流ホテルにヴィラールが投宿すると、大勢の上流人士が出迎え、数日前ウィーン大使館より帰国したばかりのプリエ侯爵もみずからの宮殿へ案内した。酒亭の喧騒を遠ざけ、美しく静かな屋敷、あらゆる看護の可能な屋敷に落着くことは、重病に陥った人間にとつて大きな安堵である。貴婦人たちはすぐさま抱えの医者ヴィラールを診察させたが、パリから携えてきたエルヴェシウスの薬剤を用いることには、どの医者も反対した。彼の赤痢が果実や不消化ではなく、過度の疲労による血液の高熱から発した、というのがその論拠である。彼らの主張によれば、イタリアの軍隊でもこの薬品が役に立たず、赤痢は頻発し、たとえば騎士テッセはこれを飲み、まもなく死んだ。こうした医者たちの談義が二日も続くうちに、ヴィラール侯爵はますます衰弱していった。医者というものはみずから与える薬品以外はきまつて退けるが、そのような論義が三日目になったので、ヴィラール侯爵はエルヴェシウスの薬剤を服用した。薬効は敏速かつ良好であり、瞬時のうちに彼は治った。まだ体力は弱っていたが、四日か五日あとに彼は自軍への復帰を決意した。敵の軍隊が近隣に隠れて、幾度か攻勢を示し、国王の軍隊を脅かしたからである。ヴィラールが別れを告げると、貴婦人たちはなごりを惜しんだ。<sup>(42)</sup>

無事帰国したヴィラールは、宣戦の布告とともにウルムやノイブルクへ出陣し、赫々たる戦果を収めた。孤立したフランスがこのスペイン王位継承戦争で前半優勢であったのは、ヴィラールをはじめ、L・J・ヴァンドームやC・タラーレなど卓越した將軍の活躍による。<sup>(43)</sup> アンリ四世の末裔であるヴァンドームは、城館アーネに洒脱な人士を集め、ときには文学者ラッフォンテーヌも招いた。アウグスブルグ同盟戦争でバルセロナを攻め落した彼は、一七〇二年イ

タリア方面軍司令官に任命される。アッダ河カッサーノの会戦で凱歌を挙げたあと、一七〇六年よりヴァンドームはトリノ攻囲の持久戦を続けた。<sup>(44)</sup> その地で彼を悩ませたのは、強力なイギリス・オランダ・ドイツ同盟軍だけでなく、峻烈な風土と伝染病の蔓延であつたらしい。ヴィラール將軍と同じく、イベカ吐劑を高く評価する司令官ヴァンドームは、フランス國王軍のため特効薬支給の上申書を提出した。

アネルマルティエグ大貴族、フランス同輩衆、プロヴァンス総督、プロヴァンス總代行官、ガレー船隊提督、イタリア方面國王軍司令官ルイ・ド・ヴァンドーム（ド・メルクール・エ・ド・エタンブ）は、左記の事項を証明する。

シャミヤール閣下の命によりエルヴェシウス殿がイタリアに送付された薬品二万服は、國王軍にとつてきわめて有用であり、いつも灼熱の氣候のもとで陛下の軍隊を苦しめる赤痢や伝染病の蔓延を阻止した。こうした事実を証するものとして、当薬品による治療や快癒が数多あり、それらの若干には余も立ち会つた。したがつて、すべての病院にこの特効薬がかならず配備されることを、陛下が命ぜられるよう切望する。

パリ、一七〇六年三月一四日

ルイ・ド・ヴァンドーム（署名）

（封印イタリア方面軍）<sup>(45)</sup>

(二)

一七〇八年ルイ十四世は軍医制度の確立のため、勅令によつて陸軍衛生局を設置し、軍医を國王の任命による一般官職と定めた。軍医という職務はしばしば立身出世や利権獲得の手段と考えられ、売買の対象ともなつて有能な人材

に乏しかった。また、ダンケルク、カレー、ブザンソンなどすべての要地と前線には五十の病院を造り、その各々に百人の軍医が配属するよう指示される<sup>(46)</sup>。

〔官職（国王軍一般医および外科医）の設置および待遇に関する勅令〕

ヴェルサイユ、一七〇八年一月。

神の恵みによりフランス王ルイは汝らすべてのため祈る。つねに幸いあれ、と。国王軍がわれらのために尽す重大な任務に鑑みて、傷病兵の救助と治療を重視する必要がある。したがって、かれらにより大きな便宜を与えるよう、国王軍の後衛および前線の野戦病院に官職として一般医および外科医を配属する。これらの医官は必要な能力と経験を備え、軍医総監によってのみ任用される人々であり、発病・負傷した兵士や士官を立派に診察し、治療できる。自分の保障を受け、一定の軍隊あるいは病院に常時勤務する彼らは、委託されて診療する医者に比して傷病兵の治療により大きな貢献ができるはずである。なぜなら、後者は経験や能力を豊かにする機会もなく、安定した恒常的な職務の医官ほど熱心には働かないからである<sup>(47)</sup>。

国王軍の編成に従ってこれらの軍事病院はフランドル方面、ドイツ方面、ドフィーヌ・プロバンス方面、ルシヨン・ギュヤンヌ方面の四つに大別され、各々の統率者として一般軍医総監一名と外科軍医総監一名が置かれた。軍隊での防疫対策を重視したルイ十四世は、初代のフランドル方面一般軍医総監にイベカ吐剤の創案者ジャン・アドリアン・エルヴェシウスを任命する。軍医総監の主要な任務は管轄する病院を定期的に巡察し、設備の程度、治療の力量、患者の状態などを国務尚書に報告するところにあった<sup>(48)</sup>。ジャン・アドリアンは二十年間この職務を勤め、一七二四年にルイ十五世から貴族の称号を授与された。叙勲を認めた国王の親書は、フランス国王軍に対する彼の貢献を高く評価している。

## 〔エルヴェシウス殿の叙爵に関する親書〕

神の恵みによりフランスス・ナヴァル国王ルイは汝らすべてのため祈る。つねに幸いあれ、と。医学博士、国王顧問官、フランドル方面一般軍医総監、親愛なる叔父故オルレアン公フィリップの侍医であるわが親愛なるアドリアン・エルヴェシウスに、朕は以下のとおり認める。〔中略〕こうした時点からエルヴェシウスは都会の住民にも田舎の農夫にも、また軍隊の兵士にも役立つように、孜々として働き、高い評価を得た。彼はいろいろな薬品を発明して、田舎や軍隊で投与し、またさまざまな著作を公にして、それらの用法を教えた。軍隊の司令官、地方の首席司法官などがこうした事実を証言している。なおまた、フランスとオランダ連邦共和国の戦争が勃発し、平和を回復する必要に迫られたので、エルヴェシウス殿はオランダに派遣された。わが曾祖父ルイ十四世は彼に数回の旅行、一七〇六年、一七〇七年、一七〇八年、一七一〇年のオランダ行きを命じたのである。そこにおいて彼はわが祖国に対する烈々たる熱情と絶えざる献身を立証した。〔中略〕

したがって、朕はエルヴェシウス殿の叙爵を定め、本人および正規の結婚によって生れたその子孫に、貴族の資格と特権を認める。〔中略〕また、朕ならびに朕の後継者に上納金と補償金を払うことなく、エルヴェシウス殿およびその子孫は貴族としての封土、領地、采地を所有できる。<sup>(49)</sup>

ジャン・アドリアンが国王一家に直属するのは、オルレアン公フィリップの侍医に登用された一七〇一年からである。ルイ十三世の孫であり、のちに摂政となるオルレアン公は、闊達奔放な生活を好み、天文学や錬金術に強い興味を示した。彼の首席侍医G・ホムベールは、バタヴィアに生れてオランダ連合東インド会社に関与し、マグデブルクで法学と植物学、ボローニアで医学、ロンドンで化学と錬金術を学んだ。ホムベールに共鳴してオルレアン公は、パレ・ロワイヤルの化学実験室に足繁く通い、百合の模様を施した溶鉱炉で製陶や鍍金も試みた。オルレアン公の周辺

は新奇で異様な雰囲気を湛え、ブルゴーニュ公ルイなど太陽王の後継者が次々と急死した際は、毒殺の犯人という嫌疑すら一時蒙った。<sup>(50)</sup>

叙勲の親書も触れているとおり、ルイ十四世は経験医エルヴェシウスに軍医としての職務のほか、政治や外交に係わる使命もときには担わせた。一七〇五年に始まる数次のオランダ出張で、すでに彼は和平交渉に関与したと言われる。ブレンハイムにおける大敗で一挙劣勢に追い込まれたフランスは、一七一〇年オーストリア皇帝の死去とイギリスの政変によって講和を結ぶ好機を迎えた。こうしてスペイン王位継承戦争を終結させる気運が高まり、ユトレヒトにおいて和平の予備折衝が始まる。財務総監と國務尚書を兼務するG・シャミヤールはこのときジャン・アドリアンを交戦国への密使としてオランダに派遣した。<sup>(51)</sup>グリッフェ神父が遺したユトレヒト条約秘史につきのような記述がある。

人々は医家エルヴェシウスに注目した。彼はオランダに生れ、フランスへ移住して非常な名声を得た。彼はフランスの国籍を有している。彼はきわめて優れた医者であるばかりか、良識にも富む。国家に関する重要な事柄に生涯を賭ける人物にも劣らず、あらゆる知恵と慎重さをもって彼は委任された使命を遂行した。<sup>(52)</sup>

スペイン王位継承戦争の発端のひとつは、カロルス二世の遺言によってルイ十四世の孫が即位したことである。こうしたスペイン国王フェリペ五世は、一七二三年のユトレヒト条約によりその王冠を確保した。しかし、スペイン王妃マリー・ルイーザはまもなく重病に陥り、名医と噂されるエルヴェシウスの派遣がヴェルサイユに要請される。ただちにルイ十四世は彼に出張を命じ、マドリッドへの旅について万全の用意をさせた。コルベールの一門に属する外務長官J・C・トルシと経験医エルヴェシウスの間に交された書翰は、外国での活動に係わるものである。<sup>(53)</sup>

〔J・A・エルヴェシウスの一七二四年二月付トルシ宛書翰〕

憂慮すべき病状を診察するよう、スペイン国王陛下が私を王妃の傍らに案内され、侍医たちからご病気の発端と経過が語られました。王妃の胸部が水腫に侵されている、いろいろな症候からまず私は判断しました。体内になんらかの膿傷が生じた可能性もあります。下腹部を調べると、肝葉に硬化と鈍痛が認められました。

〔中略〕少量の硫黄塩を加味して、スイスの創傷薬草を煎じ、王妃に服用して頂くよう、私は侍医たちに提案しました。また、二四時間に二回か三回阿片の投与を繰り返す日が続くので、苦悶を和らげ、少しでも眠らせるために、穀類のタルタルソースと一緒に与えるよう進言しました。〔中略〕王妃の寿命が一日でも長くなる方途を考える以外に、私の時間を有効に使いません。というのは、これを治療できれば、まさに奇蹟であります。<sup>(54)</sup>

### (三)

オランダ統領の主治医であったJ・F・ヘルヴェチウスと同じく、その長男ジャン・アドリアン・エルヴェシウスも数多くの著書や冊子を公にした。七冊の著書のうち一七〇三年に刊行された彼の代表作はつぎの標題を有している。『とくに頻発する病氣とそれへの卓効ある療法——公益および貧者の救済に役立つように』。この書物は非常な好評を博し、一七八六年までに五度の再版を重ね、ドイツ語、フランドル語、英語、イタリア語にも翻訳された。<sup>(55)</sup>三二八頁に及ぶ本論はさまざまな病氣の症状と療法を説明したものであるが、貧者や農民の治療を主要な目的とすることがとくに注目される。パリ高等法院院長夫人マリグリット・ネスモンへの献辞において、ジャン・アドリアンの所信が語られている。

貧者を救済される絶えざるご努力は、私たちの模範であり、光栄にもお近づきになれたいま、あなたの抱か



れる慈愛心に感動せずにはおれません。そのような篤い慈愛心からあなたはしばしば私に申されました。医学は神の恩恵であつて、そうした知識を幸いにも授けられた人は、それを埋没させるどころか、公衆に分け与えることを、宗教的な義務として命じられるのです、と。あなたの言葉から深い感銘をうけた私は、優しいお志の助けとなる対策を練り、貧しい病人の救済、とりわけ田舎で普通放置されている病人の救済を考えました。こうした見地から私は医学から教えられる最良の薬物を選定し、簡便な提要としてそれらの用法を誌しました。

とはいえ、原理を知らぬ実践は不確かであつて、こうした薬品を試みる人をもときには欺きます。私はもっとも明白な症状、すなわち随伴するさまざまな発作に照らして、病氣の本性を説明していくつもりです。このような知識は絶対に必要であり、本書で平明に説かれるので、会得するには僅かな努力と良識で足りります。敢えて申せば、医学をみずから実践する手段を、慈しみ深い人々に与えるのです。なぜなら、こうした知識を身に付けた人々は、私が有する特効薬か、この論稿で紹介した薬品を入手するだけでよいでしょう。能うかがり厳密に指示してあるので、本書を入念に読めば、そうした医薬をいつも有益に使用できるはず(56)です。

また、彼の社会的地位との係りでとくに注目すべきは、軍陣医学に関する著作である。『国王軍および田舎の病人に対するさまざまな特効薬の用い方に関する提要』は一七〇五年に出版され、財務総監兼國務尚書シャミヤールへの『献辞』を巻頭に掲げている。貧者への施療と同じく、軍陣医学は集団的な罹病を多く扱い、この書物の過半も主著『とくに頻発する病氣』の要約に近い。ただし、ここでは部隊全体の崩壊へ導く疾病をとくに扱う、と序論でジャン・アドリアンは約束する(57)。そうした疾病と療法の一例を挙げてみよう。

肋膜炎および疑似肋膜炎における〈発汗粉末〉の用法について

この薬品は発汗による治療が必要なあらゆる病氣、なかでも肋膜炎および疑似肋膜炎に対して非常に効き目がある。なお、これは田舎や軍隊においてとくに頻発する。

〔発汗粉末〕を投与するに先立ち、患者に二回か三回瀉血を施す。血液が過多であるか、病状がきわめて激しい場合には、その回数を増してもよい。こうした瀉血の繰り返しだけで、患者が全快することもある。さもなくば、煎じ薬、肺に快いスूप、下剤による浣腸、腹部の緩和（九六頁）を加えてみる。まずこれらの療法を試みたあとで、病患がなお激しく、減退せずにむしろ増幅することを確認したときに、初めて〔発汗粉末〕を用いるがよい。〔中略〕

また、〔発汗粉末〕は天然痘、麻疹、マラリア、蕁麻疹等の絶えざる高熱に対しても使用できる。そうした際の用い方については前述の提要、豚石の項（二三頁など）を参照されたい。<sup>58</sup>

フランドル方面軍医総監に就任したのちにも、ジャン・アドリアンは『獣類の病氣に関する提要』（一七二四年）、

『摩擦と発汗による梅毒の治療』（一七二五年）『ベストへの医薬』（一七二一年）などを執筆した。ラフォンによる評伝『名門エルヴェシウス家——国王用命の治療』には、彼の著作について詳細な一覧が記載されている。<sup>59</sup>

サン＝シモン公爵の大著『回想録』はヴェルサイユの実情に関する随一の史料とされるが、経験医エルヴェシウスの人格と功績をもっとも高く評価した書物でもある。フランス屈指の名門に育ちながら、公爵は政治的におおむね不遇であり、人物評価に際して好悪の感情が強いと評される。『回想録』では傲慢で横柄な権力者、たとえば財務総監シャミヤール、大貴族ヴァンドーム、首席侍医G・C・ファゴンに、いつも痛烈な言葉を浴びられる。しかし、親友であるボーヴィリエ国務補弼卿の重病を憂慮し、それを美事に快癒させた経験医エルヴェシウスに、公爵は惜しめない讃辞を捧げた。

下痢のためかなり以前から衰弱し、加えて高熱も発したので、ボーヴィリエ殿はロッシェ近郊サンテニヤンの自宅にやっと辿り着き、そのまま危篤の状態となった。別離のあとで判ったことだが、かねてファゴンは殿を糾弾していた。そして、このような出立の直前にファゴンが初めてブルボンへ連れていったのも、治療できる見込みを失ったので、厭な光景を見ないよう、殿を遠くで死なせるためである。サンテニヤンから新しい便りを受け取って、余はただちにシェヴルーズ公爵を尋ねた。一切の政略を忘れて、急拠エルヴェシウスをそこに派遣することを、公爵に促したのである。大変嬉しいことに、公爵も同感であること、翌日エルヴェシウスと一緒にみずから出発されることを知らされ、余は非常に喜んだ。

この粗野なオランダ人は医学の学位を持たないので、医者たちに疎まれ、とりわけファゴンに嫌悪されていた。ファゴンは絶大な信頼を受けて国王に侍り、医学の世界や不幸にも彼に寄りかかる人々を専制的に支配していた。エルヴェシウスはオランダ訛りの経験医と呼ばれて、ひたすら軽蔑と迫害の標的となり、またファゴンの不興や立腹を身に受け、彼から下される恥ずかしい官職に甘んじたのである。とはいえ、エルヴェシウスは長年バリーに居住しており、医者たちから敬遠され、見放された人々を数多く快癒させた。とりわけ彼は貧しい人々を偉大な慈愛心をもって治療した。診察を願う人であれば、毎日一定の時間に彼はだれでも受け入れ、薬剤やときには食物までも与えた。エルヴェシウスは根強い下痢や赤痢の治療においてとくに卓越している。彼のお陰でそうした疾患のためイベカ吐剤を調合・投与するようになった。また、この特効薬が適切でない時期や病気をも、彼は教えてくれる。エルヴェシウスに人気が集まるのは、心優しい立派な人間、公正で廉直で誠実な人間だからである。なお、彼は天然痘やほかの伝染病においても優れている。シェヴルーズ公爵は国王にみずからの決意を話した。国王はそれを是認し、珍しくもファゴンが反対しなかった。別の場合ならば、激

怒したであろう。彼が確信するところでは、ボーヴィリエ殿はもはや救われず、サンテニャンで死ぬばかりである。己れが凱歌を挙げるに、エルヴェシウスが手助けしてくれる、とファゴンは嬉しがった。神よ、感謝したい。事実は逆になった。最悪の病状にあるボーヴィリエ公爵をエルヴェシウスは診察した。七日か八日経つと、公爵はまさしく快方に向い、以前の状態に戻っていく。早くも三月八日に公爵はヴェルサイユに帰還する。無上の歓喜をもって余は駆け寄り、彼を抱擁した。公爵の居室を出て、国王控えの間を通ると、暖炉の隅にまで人波が溢れていた。なにごとか判った。人波は昂奮で揺れる。ファゴンは口元を空けて茫然とし、死者のように感じられた。それこそ癲癇の発作であつた。<sup>(60)</sup>

こうして首席侍医ファゴンに対するジャン・アドリアンの凱歌が、精彩ある筆致で描かれる。しかし、サン＝シモンも強調するように、後者の活動と功績のなかでとくに評価すべきは、貧民への献身的な施療であろう。経験医エルヴェシウスのそうした側面は、その長男ジャン・クロード・アドリアンの医業とともに、次回にあらためて詳しく扱う。

《註》

本稿における主要な文献に関しては、下記の略号を使用する。

甲 エルヴェシウス家の人々の著作

Hat : Jean Adrien HELVETIUS, *Traité des maladies les plus fréquentes et des remèdes spécifiques pour les guerres, avec la méthode de s'en servir pour l'utilité du public et le soulagement des pauvres*, Paris, Laurent d'Houry et Pierre-Augustin Le Mercier, 1703.

Ham : *Mémoires instructifs sur l'usage de différents remèdes spécifiques pour les armées du Roi et les campagnes*, Paris, Pierre le Mercier, 1705.

- Hel : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, Paris, Durand, 1758.
- HeM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, texte revue par Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1988.
- Hhl : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Société typographique, 1773. 2 volumes.
- HhM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, texte revue par Geneviève et Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1989. 2 volumes.
- Hol : Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, éd. par L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795. 14 volumes. (Georg Olms Verlagshandlung, Hildesheim, 1967)
- HaN : ヘルセニウス著『根岸国孝訳「人間論」明治図書』一九六六年。  
N 彼の著書
- Ch : Ian CUMMING, *Helvétius, His Life and Place in the History of Educational Thought*, London, Routledge et Kegan Paul Ltd, 1955.
- Hn : Jean-Christien-Ferdinand HOFER, *Nouvelle biographie générale*, Paris, Firman Didot Frères, 1857-1864. 46 volumes.
- Kh : *Helvétius, sa vie et son oeuvre*, Paris, 1907. (Slakine reprints, Genève, 1970.)
- Ls : Gottfried Wilhelm LEIBNTZ, *Sämtliche Schriften und Briefe*, Berlin, Akademie-Verlag, 1923-.
- Ld : Louis LAFOND, *La Dynastie des Helvétius, les remèdes du roi*, Paris, Occitania, 1926.
- Mb : Joseph MICHAUD, *Biographie universelle ancienne et moderne*, Paris, C. Desplaces, 1854-1865. 45 volumes.
- Sc : Marie de Rabutin-Chantal SEVIGNE, *Correspondance*, éd. par R. Duchêne, Paris, Gallimard, 1972-1978. 3 volumes.
- Sm : Louis de Rouvroi SAINT-SIMON, *Mémoires*, éd. par Y. Coirault, Paris, Gallimard, 1983-1988. 8 volumes.
- Voh : VOLTAIRE, *Oeuvres historiques*, éd. par R. Pomeau, Paris, Gallimard, 1957.

(1) E・J・エイトン著、渡辺正雄ほか訳『ライプニッツの普遍計画——バロックの天才の生涯』工作舎、一九九〇年。六九—七三、七九—一〇三、一〇〇—一〇一、一四六—一四七、二〇一頁。

E. J. ALTON, *Leibnitz, A Biography*, Bistol and Boston, Adam Hilger, 1985. pp. 40-43, 48-66, 137-138, 171-172, 209-210.

永井博著『ライブニッツ』勁草書房、一九七九年。八二—一〇二、一一三。  
 バリ滞在と前後してライブニッツはロンドンで数学者コリンズや科学者ボイルを、ハーグでは哲学者スピノザを訪問する。また、財務総監J・B・コルベールは天文台や財務局で使用させるため、彼に計算器三台の製作を依頼した。

ジュステルについては *Hn. tome XXVII*, pp. 289—290.

- (2) Gottfried Wilhelm LEIBNIZ, *Brief an Herzogin Sophie*, 4 September 1691, in *Ls. Reihe I*, Band 7, p. 19.
  - (3) エイトン、前掲書、一〇五—一〇九、一五—一五七、三六六—三六八頁。AITON, *op. cit.*, pp. 67—70, 101—106, 255—258.
  - (4) Frances A. YATES, *The Rosicrucian Enlightenment*, London, Routledge & Paul, 1972, pp. 154—155.  
 (F・A・イエイツ著、山下知夫訳『薔薇十字の覚醒』工作舎、一九八六年。一一一一—一二三頁)
  - (5) YATES, *The Art of Memory*, Chicago, The University of Chicago Press, 1966, pp. 379—389.
  - LEIBNIZ, *Gedanken zum Entwurf der deutschen Kriegsverfassung, Gesetz der Kayser habe einen General, Erfordernisse des Kriegswesens*, 1681, in *Ls. Reihe VI*, Band 2, pp. 577—602.
  - エイトン、前掲書、一七六—一七七、三六六—三六八頁。AITON, *op. cit.*, pp. 112—114, 255—258.
  - なお、ライブニッツは労働医学の先駆とされるB・ラマツィニと親交があった。
  - 川喜田愛郎著『近代医学の史的基盤』岩波書店、一九七七年。上巻、二四三—二四五頁。
  - (6) LEIBNIZ, *Brief für Herzog Ernst August*, 1681, in *Ls. Reihe I*, Band 3, pp. 131—132.
  - (7) *Hn. tome XXVII*, pp. 17—18, tome XCIII, pp. 186—188.
  - エイトン、前掲書、一五四—一五六、三〇—三〇一頁。AITON, *op. cit.*, 177—178, 209—211.
  - (8) LEIBNIZ, *Brief an Maria Aurora von Königsmark*, 25 April 1695, in *Ls. Reihe I*, Band 11, pp. 453—455.
- オスマン＝トルコによるウィーン攻囲は一四二九年から始まり、ようやく一六九九年カルロヴィッツ条約で終止符が打たれた。近東からの攻撃はフランス人にも脅威であつたらしく、哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスは『人間論』においてつぎのとおり述べる。
- 〔問〕正義が国を支配すべきことは当然である。だが、すべての法が同じ性格を有するか。
- 〔答〕そうではない。それらのなかにはいはば不易の法がある。不易の法なくして、社会は存続できないか、少くとも安寧に存続できない。所有に関する基本な法もこの種のものである。

〔問〕その種の法を無視することが許される場合があるか。

〔答〕ありえない。ただし、祖国の存亡に係わる稀有の事態は別である。

〔問〕そのとき法を無視できる権利はどこから発するか。

〔答〕一般利益から、すなわち侵すべからざる唯一の法からである。

人民の安寧こそ、至上の法であれ！

〔問〕至上の法のまえでは、すべての法が沈黙すべきか。

〔答〕そうである。トルコの軍隊がウイーンに進撃するとき、立法者は同胞の所有権を一時的に侵犯できる。すなわち、迫りくる敵軍を飢えさせるため、作物を取り払い、穀倉を焼き尽すことが許される。

〔問〕法は神聖であって、改正できないか。

〔答〕最大多数の人々の福祉に反するときは、改正すべきである。』

HmI, tome II, pp. 645—653, HmM, tome II, pp. 907—908. Hol, tome XII, pp. 109—110. HmN, pp. 168—169.

(9) Hm, tome III, pp. 686—688.

(10) VOLTAIRE, Histoire de Charles XII, roi de Suède, dans Voh, p. 103.

(11) Hm, tome III, pp. 686—688, tome XXVII, pp. 18—20.

(12) Hm, tome XCIII, pp. 424—430.

このヘルマン・モーリスは傑出した将軍として哲学者エルヴェシウスの『精神論』にも名を留める。

「サックス元帥は著書『夢想』のなかでつぎのとおり言う。『プロシア軍が進撃のときに打ち鳴らす鐘太鼓は、非常に効果的であった。兵士はこれに魂を奪われ、危険を顧みなくなった。』」

Hol, p. 449. HmM, p. 396. Hol, tome V, pp. 35—36.

またフランス国王軍におけるモーリスについては左記の書物が比較的詳しい。

Emile G. LEONARD, *L'Armée et ses problèmes au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Plon, 1958, pp. 131—140.

(13) Jean-Jacques ROUSSEAU, *Les Confessions*, dans ROUSSEAU, *Oeuvres complètes*, éd. par B. Gagnebin et M. Raymond, Gallimard, 1959, tome I, pp. 342, 409—410.

(14) George SAND, *Histoire de ma vie*, dans SAND, *Oeuvres autobiographiques*, éd. par Georges Lubin, Paris, Gallimard, 1978, tome I, pp. 31—47.

なお、この『自伝的著作集』に付せられたジュールジュ・サンド年譜および家系図を参照のこと。

*Ibid.*, pp. xxxvii-lviii.

(15) *Ibid.*, p. 22.

(16) Ernest LAVISSE, *Louis XIV*, Paris, Tallandier, 1978, tome II, pp. 71-75, 80-81.

(17) Gabriel Paul AUPHAN, *La Marine dans l'histoire de France*, Paris, France-Empire, 1989, pp. 58-61.

(17) Pierre PLUCHON et al., *Histoire des médecins et pharmaciens de marine et des colonies*, Paris, Privat, 1985, pp. 17-24, 69-70.

(18) Ordonnance du 12 avril 1689, citée dans *ibid.*, p. 70.

こうした遠洋航海や植民地経営における病氣と人命について、哲学者エルヴェシウスも深く憂慮している。

「アメリカでの産業が人間の酷使を基盤とする事実に眼を向けよ。だれしも愕然とする。黒人を捕え、売り渡すという欲情に我らの同胞は駆られた。だから、乱暴に攻め込む。こうして黒人は捕虜にされ、攻める同胞にも死傷者が絶えぬ。人道主義、万人への愛にこれほど反する行為があるのか。アフリカからアメリカへ向う航海の途中で、息を引き取る者、目的地に着きながら、所有者の気紛れ、強欲、専横で命を失う者も多い。火災や難破や壊血病のため死ぬ同胞もあろう。また、サント・ドミンゴに停泊する水夫は、怖ろしい風土病や野放図な放蕩で身を滅ぼす。これら無数の犠牲者を思い浮べよ。ヨーロッパに陸揚げされる砂糖の大樽は、人間の血に染められている。そうした物産の栽培や輸送にどれほど悲惨が伴うか。悦楽をもたらし物産の影に、不幸な人々の死と涙が潜む。それでも悦楽を求め、味うのか。酸鼻の絵図、人類の恥辱と惨状が私たちを慄然とさせる。」

*Hel.* p. 25, *HeM.* p. 37, *Hol.* tome I, pp. 247-249.

(19) LAVISSE, *op. cit.*, II, p. 469.

VOLTAIRE, *Le Siècle de Louis XIV*, dans *Voc.* p. 756.

ヴォルテール著、丸山熊雄訳『ルイ十四世の世紀』岩波書店、一九五八年。第一巻、一九七—一九八頁。

*Ld.* p. 46.

(20) Archives de la marine B<sup>69</sup>, fol. 173, citée dans *Ld.*, p. 46.

(21) フランス海軍に援護されたジェイムズ二世の反撃は一九八九年三月より数次行なわれ、アイルランドへ上陸したものの、いずれも失敗に帰した。



- (22) LAVISSE, *op. cit.*, pp. 251-255. AUPHAN, *op. cit.*, pp. 65-67.  
 Marie de Rabutin-Chantal SEVIGNE, Lettre à Madame de Grignan du 20 juillet 1689, dans Sc. tome II, pp. 646-647.  
 なお、すでにセヴィニエ夫人は同年三月二日付ムルソー宛書翰で、シェイムズ二世への大掛りな援護をかなり戲画的に描いている。
- (23) cf. Madame de SEVIGNE, Lettre à Moulceau du 2 mars 1689, dans Sc. tome III, pp. 526-527.  
 エベール・メティウイエ著、前川貞次郎訳『ルイ十四世』白水社、一九六七年。七六—八二頁。
- (24) Maxime WEYGAND, *Histoire de l'année française*, Paris, Flammarion, 1938, pp. 145-146, 150-151.  
 Madame de SEVIGNE, Lettre à Coulanges du 24 juillet 1691, dans Sc. tome III, pp. 972-973.
- (25) メティウイエ、前掲書。八八—九二頁。
- (26) LAVISSE, *op. cit.*, II, pp. 250-275.  
 たとえば、セヴィニエ夫人が孫娘ポリヌを伴ってセニユレー邸に行き、ヴァンドーム公爵と同席したことが、「一六九〇年三月一日付グリニャン夫人宛書翰」に書かれている。
- (27) Madame de SEVIGNE, Lettre à Madame de Grignan du 15 mars 1689, dans Sc. tome III, pp. 646-647.
- (28) Madame de SEVIGNE, Lettre à Coulanges du 6 août 1695, dans Sc. tome III, p. 1114.
- (29) Marie-Angélique du Gué COULANGES, Lettre à Madame de Sévigné du 2 septembre 1695, dans Sc. tome III, p. 1116.  
*Hb.*, tome XCIII, pp. 840-842.
- (30) Madame de COULANGES, Lettre à Madame de Sévigné du 30 septembre 1695, dans Sc. tome III, pp. 1122-1123.
- (31) 早くは一六八七年にセヴィニエ夫人の従兄R・リュシーラビュタンが、病死したF・R・ヴァルデ侯爵との係りでこの〈オランダ医師〉について語っている。コンティ公妃やニノン・ド・ランクロなど数多の貴婦人と浮名を流したヴァルデは、ルイ十四世とラヴィリエール嬢の関係を洩らした筆禍により、バスチーユへの投獄とプロバンスでの軟禁に処せられた。国王の不興にもかかわらず、セヴィニエ夫人とリュシーラビュタンはこの伊達男と友誼を続け、プロヴァンスの城館グリニャンにも招待した。釈放された彼の最期をジャン・アドリアン・エルヴェシウスが見取ったと思われる。ただし、経験医エルヴェシウスにセヴィニエ夫人が直接言及した書翰は、まだ発見されていない。
- Roger BUSSY-RABUTIN, Lettre à Corbinelli, dans Sc. tome III, pp. 355.  
 cf. Sc. tome I, pp. 856-857. *Hb.*, tome XCV, pp. 947.

- (32) Madame de SEVIGNE, Lettre à Coulanges du 15 octobre 1695. dans Sc. tome III, pp. 1125—1126.
- (33) Madame de COULANGES, Lettre à Madame de Sévigné du 7 novembre 1695. dans Sc. tome III, pp. 1128.
- (34) *Hb.* tome XCIII, pp. 833—841.  
ただし、セヴィニエ夫人は一六九五年一二月にボリーヌの婚礼のため、ラングドックのグリニャン邸からエクサン＝プロバンス近郊のランベスクに旅行した。彼女の体調が急変するのは、クーランジュに最後の手紙を書いた一六九六年三月一九日以降である。
- (35) COULANGES, Lettre à Madame de Simiane du 25 avril 1696. dans Sc. tome III, pp. 1684—1685.
- (36) *Hb.* tome XCIII, pp. 840—845.
- (37) Roger DUCHENE, Note sur le texte. dans Sc. tome I, pp. 755—768.
- (38) WEYGAND, *op. cit.*, p. 142.
- (39) Cité dans LAVISSE, *op. cit.*, tome II, p. 64.
- (40) Jean Lavauzelle GUILLERMAND, *Histoire de la médecine aux armées*, Paris, 1982, tome I, pp. 389—394.
- Sm.* tome VI, p. 356.
- 自国の近代化のためフランスやイギリスを視察したビョートル大帝は、エルヴェシウス著『精神論』で下記のような寸評を与えられている。
- 「イギリスの国会ではモンテスキュー裁判長の言葉が權威あるものとして引用される。イギリスが自由な国である証拠ではないか。法律と行政に関して皇帝ビョートルは有名なライブニッツに助言を求めた。ロシアはヨーロッパ諸国との交流に努め、近東諸国よりも開明的である。」「専制政治はすべてを腐敗させる。有効な政策はひとつしかない。専制政治そのものを徐々に消滅させることがそれである。こうした展望を欠いたため、有名なビョートル大帝は国民全体の福祉をなら増進しなかった。心に銘記するがよい。偉大な人物の後継ぎが偉大な人物になることは稀である。大帝はロシア帝国の政体ですこしも変革しなかった。だから、ロシアの国民は専制政治に縛られたまま、ふたたび蒙昧な状態に眠り込む。」「
- Het.* pp. 390, 393. *HeM.* pp. 348, 350. *Hol.* tome IV, pp. 184—185, 190—191.
- (41) *Hb.* tome XLVI, pp. 167—169.
- (42) Claude-Louis-Hector VILLAR, *Mémoires*, publiés d'après le manuscrit original par C. -J. -M. Vogué, Paris, Renoud, 1887, tome II, pp. 4—6.

(43) 「一七〇二年五月愈西班牙継承の大戦役は正式に宣言開始された。此の年我国にあつては元禄十五年で、赤穂の義士が吉良上野介を討つて主君の仇を報じたその年で、歐洲に於ては北方戦争（一七〇〇—一七二一）が起つてゐたので全欧は戦雲の巷と化したのである。戦の始まるや仏軍は優越な体勢を以て南は伊太利の北部、東はライン上流、北はネーデルラントに侵入し名将ヴァンドーム、タラーレ、ウイラーレ等各地に転戦し到る処優勝を博し其の名声四隣を圧して、全欧の覇権は正に仏国に占められ、世界統治の理想を有する神聖羅馬帝国（独逸）も顔色なしの形勢を呈したのであつた。」

伊藤政之助著『世界戦争史』一九三六年。（復刻版、原書房、一九八五年）第五卷、六三三頁。  
軍事的な見地から考察されたヨーロッパ史として、右記の文献はやはり貴重である。平和主義の徹底によるためか、現代日本においてこの種の研究は数少ない。

(44) *Hb.* tome XLV, pp. 1072—1076. LEONARD, op. cit. pp. 81—98.

VOLTAIRE, *Le Siècle de Louis XIV.* dans *Voh.* pp. 839—845.

（ヴォルテール、前掲書。第二卷、八二—九二頁。）

(45) *Archives nationales*, G<sup>7</sup>16, cité dans *Ld.* p. 50.

なお、ヴァンドーム將軍は一七〇八年五月一日にもフランドル方面軍司令官として同じような上申書を提出している。  
*Ld.* p. 50—51.

(46) GUILLERMAND, *op. cit.* tome I, pp. 397—398.

(47) *Édit du Roi portant d'offices de Médecins et chirurgien des Armées du Roy.* cité dans *ibid.* p. 398.

(48) *Ibid.* pp. 397—398. *Ld.* p. 52.

(49) LOUIS XV, *Lettre de noblesse pour le suier Helvétius.* cité dans *Ld.* pp. 59—60.

*Ch.* pp. 3—4.

(50) Jean-Christian PETITFIS, *Le Régent*, Paris, Fayard, 1986, pp. 96—97, 188—192.

(51) *Ld.* pp. 52—55.

(52) GRIFFE, *Histoire des négociations de la France avec la Hollande qui précédèrent la traité d'Utrecht*, Liège, 1767, cité dans *Ld.* 54.  
なお、一介の経験医が外交の任務を課せられたことに、サン＝シモンは厳しい批判を下している。これはエルヴェシウス本人への評価というよりも、軍事・外交に責任をもつ財務總監や外務大臣への非難と考えられる。

「エルヴェシウスにふたつのオランダ旅行を命じたために、シャミヤールは公衆の大変な笑いものになった。父親に会

うとの名目だが、実際には外交交渉をするためであり、あちらでもこちらでも騙された者はいない。〔中略〕エルヴェシウスはシャミヤールの主治医である。そんな旅を引き受けた、と前者を非難できない。財務総監が命じたものである。フランスの内でも外でも、到る所で囁かれる辛辣な嘲弄、医者風情の、それも経験医の外交交渉という嘲弄、止まるところを知らぬ痛烈な悪口から、それはだれでも判断できる。』

Sm. tome III, pp. 393-394.

(53) Ld. pp. 55-59.

サン・シモン著『回想録』にもこの旅行の経緯が記録されている。

「スペイン王妃はかなり以前から顔面と咽喉に強度の瘰癧を患らい、危篤の状態にあった。どの医者も頼りにならないので、彼女はエルヴェシウスの診察を希望し、彼の派遣をフランス国王に急便で依頼した。遠出する余裕など持たず、王妃の病状を察したエルヴェシウスは、気が進まない。しかし、フランス国王は断乎命令した。彼はただちに一台の駅馬車で出発し、事故が生ずる場合に備えて、オリーの子息を乗せた他の一台がそれに続いた。〔中略〕二月十一日にエルヴェシウスはマドリッドに着いた。王妃を観るや、ただちに彼は言った。救うことができれば、まさに奇蹟だ、と。彼女はイエズス会士の聴罪師を持つており、妹にあたるフランス王太子妃と同じような用意をさせた。最期の秘蹟が用意され、いよいよ死に臨んだ王妃は、聴罪師に感謝し、いまひとりドミニコ会修道士を呼び寄せる。スペイン国王は九日から王妃と床を別にする。大いなる勇氣と覚悟と信仰を感じさせながら、王妃は十四日に逝去した。」

Sm. tome IV, p. 734.

(54) Jean Adrien HELVETIUS, Lettre à Torey du février 1714. citée dans Ld. pp. 57-58.

(55) Ld. pp. 66-67, 74-77. Kk. pp. 5-6.

(56) HAt. pp. Aj-Ajii.

(57) HAm, Titre et avertissement.

(58) HAm, pp. 65-69.

(59) Ld. pp. 66-77.

(60) Sm. tome I, pp. 822-823.

哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスの著作には、宮廷生活と貴族社会への批判が随所にみられるが、ヴェルサイユにおける父祖のさまざまな体験もそうした論述の素地と考えられる。参考までに『精神論』第四篇第十三章「世才」

の一文を、サン・シモン著『回想録』の辛辣な評言と併読して頂きたい。

「権力者が公益から背離し、恣意的に榮譽を配分する国もある。そこでは褒賞の授与者を喜ばず技倆が、世才と呼ばれる。そして、処世術の巧拙は精神の優劣よりもむしろ性格の如何によつて決まる。権力者の氣に入る資質や性格を考えてみよう。いかなる人物、いかなる状況にも順応できる性格が寵愛を受ける。そうした性格を持ち、幸運に恵まれれば、地位や財産にありつける。英明な精神など必要でない。〔中略〕榮達の道は偶然に支配される。美女の父親や夫や友人に君は偶々なる。そして、王侯の恩顧を得るため、この美女を宮殿に送る。また、にわかに権力者が密偵を求める場合もある。そのとき偶々君がお眼に留まる。〔名譽も求めず、感情に走らない男こそ完璧な宮廷人と言える。〕オルレアン公はこう洩らされた。感情に走らぬことだけが条件であれば、完璧な宮廷人も数多く出せる。〔中略〕

世才には狭隘な觀念だけが必要である。偏狹な觀念をどれほど持とうと、そうした精神を公衆はけつして尊敬しない。策略家は己れを万物の中心と考える。彼らはすべてを自己の利益に結びつける。公益など意に介さない。立身出世するかどうか。権力を振りかざして、人々を威嚇し、平伏させる。国民的な敬愛、不滅の名声をどうして彼らが獲得できよう。榮達を遂げるや、こうした人物の才氣が光を失う。そして、権力の座が薄汚くなる。立身出世のために彼らは、策略家としての才覚を磨いた。そのような才覚は権力者に相応しい精神、すなわち深い思慮、広い視野、強い意志を備えた精神となんらの係りもない。世才は低劣な性格と結びつく。それゆえ、公衆は策略家をますます軽蔑する。」

*Hel. pp. 583-586, 589-590. HelM. pp. 514-518. Hol. tome VI. pp. 83-84, 91-92.*